

## 【岐阜】ダイヤモンド・プリンセス号のCOVID-19患者以降、1440人を受け入れ-松久卓・国立病院機構長良医療センター院長に聞く◆Vol.1

2023年4月7日（金）配信 m3.com地域版

国立病院機構長良医療センター（岐阜市）は2005年3月に2つの病院を統合して開院。産科医集約のため、2020年に産科周産期医療から手を引いたが、休床病床を活用して新型コロナウイルス感染症（COVID-19）患者を積極的に受け入れた。同センターの地域における役割やCOVID-19への対応状況などについて同センター院長の松久卓氏に聞いた。（2023年3月7日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら



国立病院機構長良医療センター院長・松久卓氏

### —国立病院機構長良医療センターの概要を教えてください。

当センターは、岐阜市にある独立行政法人国立病院機構（NHO）が運営する医療機関です。2005年3月に国立病院機構岐阜病院と国立病院機構長良病院の2つの病院を統合し開設されました。当センターは（1）筋ジストロフィー・重症心身障がいなどのセーフティネット系医療（2）肺がんや結核をはじめとする呼吸器疾患（3）小児科疾患全般（4）産科周産期医療を4本柱として、それぞれの分野で専門性の高い医療を提供してきました。

病床数は413床で、一般病床が203床、重症心身障がい児（者）・筋ジストロフィーなどの病棟が180床、結核病床が30床です。また、職員は、常勤が387人、非常勤が43人です。医師は常勤24人、非常勤3人で、看護師が247人です。



国立病院機構長良医療センター

### —国立病院機構長良医療センターの地域における役割は。

私が2020年に院長に就任する直前までは、先ほどの4本柱で運営していましたが、2020年に産科医を岐阜県総合医療センター（岐阜市）に集約したため、当センターは産科周産期医療から手を引き、3本柱になりました。そこで私は、4本目の柱として高齢者医療を始めることにしました。今まではどちらかというと、子供や妊婦さんなど若い人を診る病院だったのですが、人口が減少し高齢化しているのも、今後は高齢者を診ていく必要があると考え、2023年1月に緩和ケア病棟を開設し、現在は高齢者医療を加えた4本柱で医療を提供しています。

また、2020年に拡大が始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響で、当センター以外の県内の結核病床が全てCOVID-19病床に替わったため、県内の結核患者を当センターで全て引き受け、2023年3月時点で17人の結核患者が入院しています。

もう一つ、当センターではCOVID-19への対応を積極的に進めています。2020年2月18日にダイヤモンド・プリンセス号のCOVID-19患者8人を当センターで受け入れました。その後、流行初期の軽症者も含めて、入院基準に当てはまるCOVID-19患者を2023年2月末までに1440人受け入れています。この人数は、岐阜県で一番多いと思います。当

センターにはECMOがありませんから、ECMOが必要な患者さんは岐阜県総合医療センターや岐阜大学医学部附属病院での対応になりますが、人工呼吸器が必要な患者さんまでは当センターで受け入れました。COVID-19診療についても、この地域では、存在意義を示したと思っています。

——ダイヤモンド・プリンセス号のCOVID-19患者を受け入れるにあたって、専用病床はどのように準備したのですか。

ダイヤモンド・プリンセス号のCOVID-19患者の受け入れに関しては、関東の病院だけでは多くの患者さんを受け入れられないので、国から中部地方の病院にまで受け入れの要請がありました。当センターには、もともと休床病床があり、そこをCOVID-19専用病床として個室と大部屋を1人部屋にして8床確保しました。

あの頃、COVID-19の毒性・感染力がどのぐらいか分からなかったので、夜間、横浜からダイヤモンド・プリンセス号の患者さんをノンストップで当センターまでバスで移送しました。到着して皆さんが最初に言われたのは、「トイレに行かせてくれ」でした。

私たちも、どのくらい怖いウイルスか分かりませんでしたし、中国で診療していた医師が亡くなったと聞いていたので、最初の頃はスタッフ全員、怖かったと思います。家族に移してはいけないからということで看護師たちも家に帰らず、車の中や病院で寝泊まりした人もいました。

——その後、COVID-19にどのように対応したのですか。

その後もCOVID-19患者を積極的に受け入れました。2020年4月1日に20床、2021年1月18日に30床、同年4月19日に40床に増床し、第5波のデルタ株では、可能な限り増やしてくれという県からの要請で、2021年10月29日に1病棟全て48床をCOVID-19病床にしました。

——現在のCOVID-19入院患者の状況は。

現在、COVID-19はかなり落ち着いており、2023年3月7日時点で入院患者は1人です。

——COVID-19専用病棟を開設したことで、入院や外来への影響はありましたか。

当センターは、休床病棟にCOVID-19専用病棟を作りましたので、場所に関しては問題ありませんでしたが、一番の影響は医師や看護師の手がCOVID-19に取られて、他のところが手薄になったことです。COVID-19患者を診ながら一般の診療もしないといけないので、スタッフは大変でした。しかし、スタッフ全員が3年間頑張ってくれて、一般診療の患者さんが入院できないということはありませんでした。

——COVID-19に対応する院内体制は。

呼吸器内科と呼吸器外科の先生がCOVID-19入院患者を担当しました。それ以外の発熱外来や熱のある人のPCR検査などは、他の診療科の医師全員で担当しました。当院の呼吸器内科医は、以前発生した新型インフルエンザの時に中部国際空港セントレアや県営名古屋空港の検疫を行ったので、感染症や新興感染症に対する知識がありました。

——看護師の体制は。

看護師は、他の病棟から集めて来ました。看護部長は大変だったと思いますが、災害やパンデミックの時は、国立病院機構は中心になって働かないといけないということでお願いしました。看護師も医師と同様、感染症に対してある程度知識があったので、すぐに受け入れ体制が確保できました。

——院長として、どのようにスタッフのモチベーションを維持したのですか。

院長に就任した当初、1～2年である程度終息すると思っていましたから、「夜明けの来ない夜はない」とか、「雨の止まない雨降りはない」と言いながら、もう少しだから、頑張れと言っていたのですが、予想に反して3年ぐらいたってしまいました。

当センターは国立病院機構の施設です。災害や今回のようなパンデミックの時には、先頭に立って対処しないといけないという意識が職員にありますから、皆さん頑張ってくれました。

#### ◆松久 卓（まつひさ・たかし）氏

1985年岡山大学医学部卒業、同年岡山大学医学部附属病院。1991年香川県立中央病院、1993年住友別子病院。1995年岐阜大学医学部附属病院。1998年松波病院。2005年羽島市民病院。2008年東海中央病院勤務、2013年同院医務局長、2014年同院副院長を経て、2020年独立行政法人国立病院機構長良医療センター院長に就任（現職）。

【取材・文＝紅 義朗（写真は病院提供）】

